

岩倉とその周辺をめぐる

——自然と歴史を中心に——

出席者 (ABC順)

社史史料編集所
事務主任 河野 仁 昭

高等学校教諭 楠 木 幹 浩

大学文学部教授 森 浩 一

人文科学研究所
教授 仲 村 研

人文科学研究所
教授 杉 井 六 郎

(司 会) 鈴 木 重 治

校地学術調査
委員会
調査主任

鈴木 さつそく座談会に入りたいと思います。

いま園部部長からあいさつをちょうだいしたわけですが、そのなかで触れられたように、同志社が岩倉に校地を求めて教育研究活動を開始してから、ちょうど五十年が過ぎようとしているわけです。

ところで、岩倉を対象にしまして、同志社関係の教育研究機関がすでに何回かの学術調査を行っているわけです。岩倉の高等学校でも総合調査を行ったことがありますし、同志社大学の考古学研究室が古代学研究会と協力しまして、本山の緑釉の窯を発掘したこともございます。また、考古学の実習室の学生諸君が森先生の指導で、自主的に分布調査を重ねて成果をあげたこともあります。更に、私どもの校地学術調査委員会が岩倉の校地のなかで集落遺跡の一部を発掘調査させていただいたこともございます。とくに最近の岩倉周辺での研究では、深泥池の団体研究グループの成果を見落としてはいけない、むしろ高く評価して良い成果だというふうに思っています。

このような研究成果をふまえてサブタイトルが「自然と歴史」ということでもございま

すので、話の糸口としまして、私どものほうから岩倉の校地で調査した資料の一部を紹介して、あわせて周辺の遺跡のうち古い部分を若干紹介させていただこうというふうに思います。

周辺ということばを使っているわけですが、最初にもその範囲といいたしうか、広がりを確認しておきたいと思います。岩倉とその周辺といえますと、岩倉の盆地、当然これが入るわけです。さらにこの周辺を抱くようにして連なっている低い丘陵があります。北側に北山が連なり、東側には比叡山というようなことで、周辺の山地を抜きにすることはできないわけです。この四明岳から八瀬、大原、岩倉、静原、鞍馬、花背、北山、上賀茂、西賀茂の一带をも含めて、対象にしておきたいと思っています。

さて、校地学術調査委員会の調査では縄文時代の遺物に加えて弥生時代の遺物が検出されています。これは京都でかなり古くから遺跡の調査が行われているわけですが、弥生時代の史料を岩倉の盆地の中で確認した最初のものであるわけですし、すでに校地学術調査委員会の調査資料として刊行しており

ます。縄文時代の資料はその終わりの土器片でございます。岩倉の校地は、一部岩倉川、長代川等によって形成された扇状地の上面のついでに、発掘した地点は、大学の馬術部の使っております馬場のすぐ西側です。

先ほど申し上げました地域に限って古い遺跡について考えてみますと、まず、岩倉の盆地の南側にあります丘陵の一部に「けし山」という山がございますが深泥池のすぐ西北になります。この「けし山」から後期旧石器時代のナイフブレード、ナイフ形石器が発見されております。これは京都府全体を含めても最古の資料です。サヌカイト製の翼状剝片を素材にしたナイフ形石器です。その次に登場するのが本山、けし山よりも西側になります。その丘陵上から採集された尖頭器、ポイントです。これもやはり後期旧石器時代に属するわけですし、岩倉の周辺から確認されている後期旧石器時代の資料としては見落とせないものだと思います。

旧石器時代から新石器時代に移りかわる時点について見ますと、例の修学院離宮のすぐ北側になるわけですが、高野川が八瀬

から上高野あたりで若干蛇行しながら南下しています。そこに注いでいる梅谷川に面した赤山の斜面、ここに縄文時代の一番古い時期の資料が出土しています。押型文土器です。修学院の遺跡と呼んでいるんですが、これは現地を確認してみますと、京都市の文化財研究所で出しております地図の説明地点は明らかに間違いでして、訂正しておく必要があります。縄文時代の早期以後の資料では、一乗寺あたりで縄文時代の前期から後期にかけての史料がありますが、古くから知られている上賀茂遺跡を加えて、縄文時代までの代表的な遺跡かと思えます。

旧石器時代から縄文時代、弥生時代を過ぎますと、岩倉盆地ではかなりの遺跡が確認されています。この岩倉周辺を舞台として人間がいろいろな活動を行った証拠を示しているわけです。

先ほど申しました旧石器時代、縄文時代、実はこの時代のことを描くには、やはり当時の自然環境といいたしうか、自然的な景観を含めて理解しておく必要があると考えておりますが、自然環境といえますと、当然地質とか地形、動・植物等をカバーするのが

よりしいわけでしょうけれども、たまたま深泥池団体研究グループの研究成果を理解していくさいに、それらの問題を全部カバーできるとすれば「植生の変化」、「気候の変化」と申しましょうか、そこらにひとつ焦点をしばっていただきますして、楠木先生から話をさせていただきたいと思います、楠木先生、ひとつよろしく願います。

深泥ケ池と自然環境の変化

楠木 私どもは、一九七一年から学校の先生や大学院生を中心に深泥池団研グループをつくって団体研究法にもとずき深泥池を研究してまいりました。深泥池は京都盆地の北のほうにある海拔七十五メートル、九ヘクタールの、温帯ではひじょうに珍しい浮島をもった小さな池です。京都に在住なさる学生さんは、一度はそこにおいでになって、京都のような大都会には珍しい、ひじょうに静かな自然に感激してこられるのではなからうかと思えます。

昔から動植物の宝庫といわれまして、昆虫・植物・プランクトンなどのいろんな研究がなされてきました。とくに昭和二年には植物

が生態学上重要な池であるという理由で天然記念物に指定され保護されてきました。

なぜ深泥池が注目されたかと申しますと、ミツガシワ、ホロムイソウに代表されるウルム氷期からのレリック植物がそこに生存しているということ、さらに氷河期以降暖帯性の植物も混入して、渾然一体となって小さな植物社会をつくっていることです。また、食虫植物などもひじょうに注目され十三種も見つかっています。私どもは、そこにボーリングを打ち、連続コアを得たいと思いました。連続コアをとりますと、その時代の気候の変化、植物・植生の変化、それからさらには堆積環境の変化、火山灰が見つかればよその対比などができますので、それを期待しておりました。文部省にお願いして、許可を得まして、四本のボーリングを打ちました。それからさらには鉄パイプを三十本ほど打ちまして、そこでいろんな総合的な試料を得ました。

火山灰は三枚見つかりました。

一番上の火山灰がおよそ七千年前、二番目の火山灰が八千年前ぐらいです。一番下が一万年少し前の火山灰です。一番上の火山灰は

どうも赤ホヤといわれる火山灰に対比できるんじゃないかということが、¹⁴C法による年代測定の結果や火山灰の分析で出てきました。

この火山灰は横大路や大山崎、壬生車庫、鷹ヶ峰など、京都の各地で見つかっておるわけですね。二センチぐらいでひじょうにきれいな火山灰で、町田洋氏はトカラ列島から噴出して飛んできたのではないかといられています。

深泥池ではみつかりませんでした。最近注目された広域テフラがあります。町田洋氏が約二万年前（ウルム氷期）に鹿児島島の始良カルデラから噴火が起り、関東・東北地方まで火山灰を降らせたと申しています。京都では二十センチ程の厚さで火山ガラスの美しい火山灰ですが、平安神宮、大原、苔寺付近、鷹ヶ峰などで見つかっています。岩倉でも三ヶ所発見されていますが、この火山灰の年代がわかっていきますので追跡調査すれば、時代の決定や、岩倉盆地形成史の解明に役立つことと思います。

それから、あとで申しますが、花粉分析によって、植生の時代ごとの変化がわかってまいりました。ただ高知大学の中村純先生とは多少ずれが生じている。そのずれの問題が

深泥池付近の森林変遷と気候変化

年代	花粉による 分 帯	森 林	気 候	火 山 灰	文化階梯
0	スギ	スギの植林?	現在とほぼ同じ	銀閣寺付近の 火 山 灰	現 在
700?	マツ+スギ	アカマツ林			平 安 時 代
1500?	カシ+マツ+スギ	マツ林の増加			古 墳 時 代 弥 生 時 代
2000			や・温暖、湿潤		晩 期
3000		常緑のカシ林	温暖、湿潤		文 明 時 代
4000	カシ	(アラカシなど)	現在とほぼ同じ		
5000					
6000	ナラ	混交落葉樹林	現在とほぼ同じ		
7000	エノキ	(クスギなど)	や・湿潤	深泥池上位 火 山 灰 (アカホヤ火山灰?)	後 期 旧 石 器 時 代
8000	ムクノキ			深泥池中位 火 山 灰	
9000	ナラ	落葉広葉樹林 (ミズナラ) (ブナなど混生)	や・寒冷 や・乾燥	深泥池下位 火 山 灰	
10000	針葉樹 + カバノキ	針葉樹林 (五葉松、ツ ガ、ミ、コウヤ マキなど)	寒 冷 乾 燥	アイラ火山灰 (平安神宮、大 原など)	
20000					

※深泥池の研究、(地球科学30巻 1, 2号) より改編 (楠木)

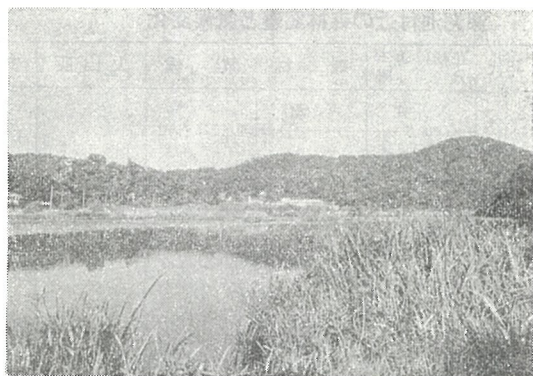
何であるかというのは、今後の問題です。それから珪藻分析や粒度分析や灼熱減量によって池の変遷史を調べてみました。そこでいろいろ調べてまいりますと、深泥池はかなり特殊な状態、つまり閉鎖的な形で残ってきたことをあらわしています。泥炭層

を見ますと、九五%ぐらいが炭質物でできてまして、両側から入ってきたものというのはきわめて少ないんです。また堆積速度もきわめて小さく年平均〇・五ミリ以下になりました。これはひじょうに閉鎖的に池が保持されてきたということを物語っており、植物

の遺体だけがたまってきたような状態であると思います。この池の保持には鴨川の扇状地の発達が深く関係し役立ってきました。

また最初から予想されたように、ウルム氷期以後連続的に続いていた池、つまり、ウルム氷期のレリックみたいな池であるということになります。そしてミツガンワも各層準からはっきりと花粉が確認され、やはりウルム氷期のレリックであるということが確認できました。

それから池の深さですが、三木茂氏が学生時代ヒルにかまれながら泳いで浮島に渡り浮島で竹竿を突っ込んだそうだけれども私どもは鉄パイプを三十本程差し込み、またボーリングをしたわけで、だいたい九メートルぐらいの深さがありました。ボーリングの試料から七千五百年ぐらい前、縄文早期の後半ごろに鴨川がはんらんして深泥池に流れ込んだという証拠が、その堆積層の中から発見されてきたんです。礫層の中に亜円礫から円礫の砂岩の礫が入っていました。これは川でかなり摩耗されなかったらできないでしょう。鴨川上流に砂岩の層がありま



(深泥池の近景)

すから、そちらからきたのでしょう。

ついでに申しますと、岩倉盆地がどうしてできたかということはよくわかっていません。周山向斜の外縁に当り、地層の走向方向に盆地が延びており、狭在している頁岩の差別侵食の可能性もあります。また、鮮新世末から盆地が益々沈降し、山地は益々隆起する運動が続いていますが、このようにしてでき

た京都盆地の形成史と合わせて考える必要があります。

まだいろいろとおもしろいことがあります。が、この場合は植生変化についてしぼってもう少し話させていたいただきたいと思っています。

表で見えていただいたらわかりますが、一万年より前は針葉樹—カバノキの時代です。亜寒帯の寒冷な気候であります。深泥池の状態はミツガシワやホロムイソウが繁茂しまして、水ゴケが成育した湿地の状態でしたが、周辺の山々をみますと、ゴヨウマツとかツガとかトウヒの仲間、つまりいまの北海道の北のほうの気候であつたらしい。いまよりも気温は恐らく七、八度ぐらい低かつたようです。千何百メートルから二千メートルぐらいの気候で、八ヶ岳や上高地のあたりのイメージを描いてももらつたらよろしいかと思えます。岩倉盆地のあたりではおそらくシラカバの木が生え茂り、そこには静かなきれいな川が流れていたことでしょう。鴨川が崖錐で崩れた礫を京都盆地に運んでいた。この京都盆地に礫を運んでいく状態というのは、京都盆地やその周辺山地の地盤の隆起と沈降の問題を考えなきゃならぬのですけれども……

それから、下から二番目のがミズナラとかブナのような落葉の広葉樹林の時代です。

(一万〇七七〇〇年前) ここでは針葉樹はほとんど姿を消しまして、いわゆるミズナラとかブナの混合樹林になってきたわけです。いわば寒冷化から温暖化の過渡期になりますので、気温はまだ現在よりも低くて、年較差もひじょうに大きく、不安定な時代であつたというふうに思われるわけです。海拔千メートルぐらいの信州のイメージを抱えていただいたい時期ではないかと思えます。

それからその次のミズナラエノキムクの時代(七七〇〇〇〜五〇〇〇年前)ですが、クスギとかカシとか、エノキとかムクというのが生えていまして、年較差も小さくなり温暖で湿潤な気候になってきたようです。現在の京都ぐらい、いまとあまり変わらないような状態だろうと思います。

それから次は常緑のカシの時代(五〇〇〇〜二〇〇〇年前)ですが、アラカシのような常緑のカシやサザンカが生え茂る状態で、年較差が小さく、今より温暖で雨が多い気候で京都も現在よりも暖かかった。つまり九州から山陽地方の状態がこの時代に当たるんじゃない

ないかと思ひます。

それから次はカシーマツ—スギの時代（二〇〇〇—一五〇〇年前）であります。つまりこの時代、二千年ほど前からスギやマツが増えてきた。マツが増えてくるというのは、人間の影響が出てきたという証拠にされています。この時代から少しづつ伐採が進み山が荒らされていく、その傾向が深泥池、岩倉周辺においてもあらわれてきます。

それから次のマツ—スギ時代（一五〇〇—七〇〇年前）になりますと古墳時代に入ってきますが、人間による自然植生の破壊が著しく進行して、周辺の山はほとんどアカマツの林でおおわれるようになります。

最後にスギの時代（七〇〇年前）です。スギがふえてきていますが、これは平安時代に植林がかなり行われたんじゃないかと推測しております、この点についてはいろいろお聞きしたいものです。

鈴木 いまのお話の中で地質学の年代でいうと第四紀、とくに氷河期でいうとウルム氷期の終りから後氷期ですが、この時期の前後はかなり寒冷であつて、現在の信州上高地的景観が植生の上で見られるというお話でし

た。ちょうど先ほど触れました後期旧石器時代がそれに相当すると思へられるわけです。鴨川が多量の砂岩礫を押し流したという縄文時代の早期末といえは、地球的な規模で温暖化が進んで、東京湾など奥深くまで海水が進入したいわゆる縄文海進の時代ですね。

また、植生の変化のなかで弥生時代から古墳時代にかけての材料を出していたわけですが、古墳時代関係の遺跡も岩倉周辺にはかなりあるわけです。そこで森先生から、古墳時代以降を含めてお話しいただけますか。

洛北の遺跡群と和珉氏

森 岩倉一帯の古墳時代研究というのはまだあまり進んでないわけです。ここは主として竊葉、土器とか瓦の生産の研究はかなり進んでおるわけですが、それ以外の研究はまだあまり見当がついてないんです。ただ、岩倉を考へる場合、やはりその西側には上賀茂神社という日本全体でも古代からたいへんな信仰を集めた神社があるし、それから東のほうには比叡（山）があるし、そして北のほうには貴船とか鞍馬寺があるという、信仰の重要な場所であつた地域であるということが一

つ特色として出てきますね。

それで、そういう地帯の人間の歴史の跡をずっと考えてみると、先ほど縄文のことまで鈴木さんに説明していただいたわけですが、上賀茂神社の裏山には京都市でも有名な上賀茂遺跡というのがあつて、これは縄文後期の遺跡で、ちょうどぼくが同志社大学の予科の学生のころに上賀茂神社の裏山をゴルフ場にあつた。あれは古いゴルフ場ですね——造成するということで、何回か行って拾つた土器が新町の考古学資料室にありますけれども、縄文後期の土器とそれから石錘——網のおもり——が幾つか出てました。ただし、ここの網のおもりは小さいですね。魚をとつた網としてはよほど小さな網です。縄文後期の遺跡としては京都市周辺ではかなり高い位置にあるんですが、しかしほぼ同じような時期に京都盆地のなかではひじょうに低いところ、たとえば近鉄の上鳥羽の駅付近にも縄文後期の遺跡を残していますから、低いところにも同じ時代の集落があつたと思います。だから上賀茂遺跡のあつた場所まで大きな湖があつたということではないらしいのです。

それで、要するに縄文後期には上賀茂遺跡



岩倉周辺の主要遺跡など略図

1. ケン山旧石器出土地 2. 西山旧石器出土地 3. 赤山縄文遺跡 4. 一乗寺縄文遺跡
5. 上賀茂縄文遺跡 6. 本山古墳群 7. 小野毛人墓 8. 崇導神社 9. 大雲寺,
10. 岩倉神社 11. 賀茂神社 12. オカイラの森小野瓦窯址 13. 幡枝瓦窯址
14. 円通寺 15. 西賀茂瓦窯址群 16. 岩倉具実乳夫の碑 17. 同志社高商の碑

のような大遺跡が一時的には出てくるんですが、その後比較的住みにくいところであったらしい。縄文晩期にもそれほど大きな遺跡はない。それから弥生時代にも、最近の同志社大学の発掘で弥生式土器の破片は出ていますけれども、いまのところ岩倉盆地のなかに弥生時代の大きな農村があったような形跡は認められない。岩倉盆地ということばかりに使うておきますが、岩倉盆地だけではなくて、同志社がある京都市の左京区であるとか、右京区、上京区の京都の市街地一帯でもそれほど大規模な弥生遺跡はいまのところ出ていません。

だから、先ほどのお話で、弥生時代ごろからぼつぼつ岩倉盆地の植生に人間の影響のあとがあるのではないかということでしたけれども、いまのところ考古学のほうからは、西暦紀元前後あるいは西暦紀元後三世紀とか四世紀の時代に限って言えば、まだそれほど大きな森林伐採をここでやったかどうか、遺跡のほうからはちょっといえない。遺跡のことですから、将来まだ出るかも知れませんけれど、いまのところはそういう状況です。

それで、岩倉にはだいたい六世紀の段階に

なると、人間が大きな古墳なんかを明らかに残しかける。とくに名高いのは幡枝の自動車の練習場……深泥池を抜けて北へ下がったところ……

その幡枝の自動車の練習場をつくるときに幾つか円墳をつぶしたらいいんですが、その円墳から一面わりあい大きな銅鏡が出土している。この銅鏡はいろんな動物の模様が描いてあるんですが、その鏡にたがねで字を三つ彫ってあるんです。一番上の字が「失」という字にも見えるし、それから「夫」という字にも見えるんですが、その次が「火」です。



小野毛人の墓

それから三字目が「鏡」です。だから、「火鏡」というのははっきりしている、そういうものが出てきたんです。これはあとから書いたようにも思えるけれども、あとからというのはずっと後にといい意味ですが、しかしよく調べてみると、これと書体の同じものが宮崎県の持田古墳群からやはり一面出ているんです。そのほうは二字で「火鏡」だけ書いてあるんです。ですから、日本の鏡の歴史では、六世紀というところからかというともう衰えてきているわけで、日本では二世紀から四世紀ごろが鏡をひじょうに珍重するクライマックスだったのですが、その鏡にたいする流行が衰えてくる六世紀ごろに、少なくとも岩倉の人たちは、鏡の性格を「火鏡」、火の鏡だという意識をして、古墳のなかに埋めておったというのがわかり、たいへん重要な例です。

幡枝という場所が、考えようによりますと上賀茂神社のすぐ裏山にあたりますから、賀茂（鴨）氏集団の信仰を示しておるものなのか、それとも賀茂氏に関係ないものか、これは今後の重要な課題になると思います。

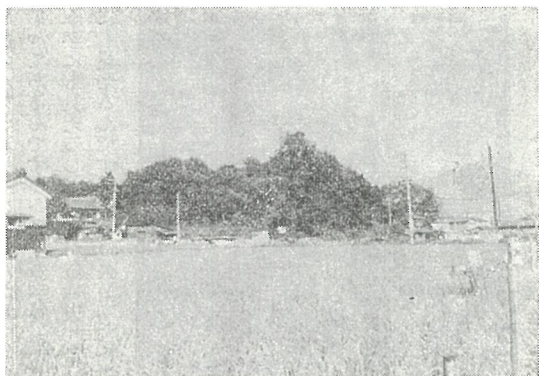
それから同じ時代、六世紀ごろにやはり幡

枝の北のほうに八幡古墳群というのがあって、現在も果樹園が植木を植えてある山のなかに丁字形の横穴式石室が残っています。これは全国的にもひじょうに数の少ない、また分布の限られたものなんです。それで、この丁字形の横穴式石室で一つひじょうに重要なことは、たとえば近畿地方ではどういふところにあるかといえますと、滋賀県の真野古墳群に幾つかある。

真野古墳群というのは、岩倉から大原へ入って、そして途中越えを越えて滋賀県へおりにいったところの和邇の一带にたくさん古墳群があつてその一つが真野古墳群なんです。が、この滋賀県の和邇の一带というのは、京都大学の岸俊男先生の研究以来急にクローズアップされてきた古代の大集団のワニ氏に關係するもので、ワニ氏というのはワニノ何ガシという人もおりますけれども、いろんな枝氏に分かれている。いろんな枝氏の集合体の一つの和邇という大集団になるわけです。

和邇氏というのはたとえば、栗田、小野、真野、春日、大宅、柿本そういういろんなものが集まって構成するわけですが、このワニ氏の一つの根拠地がやはり滋賀県の今日の和

通一帯ですね。今日でもバスで走っていきま
すと、和邇というバス停があつて、そのお隣
が小野神社というバス停があるわけです。そ
れからもう一つの中心が奈良市の春日とい
地名、あるいは天理市の北のほうの柿本と
和邇という地名が残っていますけれども、要
するに奈良県北部です。いまの古代史や考古
学の方法では、どちらのワニがより古いかと



幡枝瓦窯址から比叡山を望む

いうことは、まだわからないのです。奈良の
ほうが古いのか、それとも滋賀の湖西のほう
が古いかわからないが、いずれにしても奈
良市の北部から滋賀県の湖西にかけて勢力を
ふるっていったのが和珥氏であります。そ
のワニ氏というのは、京都の山科にも相当勢
力を植えていた。それから京都市内の東
山のふもとにも、たとえば粟田という地名が
残っていますように、いろんなところに勢力
をもっている。それからもう一つは岩倉で
す。

岩倉周辺では慶長十八年（一六一三年）に
崇道神社の裏山から、これは有名な事件です
が、小野毛人の墓誌が出ています。この遺跡は
日本でもひじょうに重要な、つまりだれの墓
か、いつの墓かという基準になる例なんです
が、そして出土したのは古いわけですが、そ
の後もずっとその場所が保存されていますの
で、考古学でよくわかるのです。小野毛人
（おののえみし）は小野妹子の子供である。
つまり遣隋使で名高い小野妹子の子供が岩倉
盆地の東のほうに墓をつくっている。年代は
だいたい六七七ごろと推定されています
が、その銘文のなかに出てくる専門用語から

多少年代が下がるのではないかといいことを
推定する学者もいますけれども、それにし
てもだいたい六七七ごろ、つまり古墳時代の
ほぼ終末期にあたり、古墳というよりは古墓
が岩倉周辺につくられている。

ですから、この例からいいますが、岩倉
にはある段階からワニ氏系の集団が勢力をの
ばしてきている。そして先ほど言いました途
中越えを越えて滋賀県の湖西、それから山城
を通って奈良市北部とのちょうど中継地とし
ての重要な土地が、岩倉になるわけですね。

この岩倉盆地の小野、つまりワニ氏が先



小野瓦窯址出土の古瓦

どの真野古墳群なんかにもT字形石室を残しておるということから考えると、幡枝の八幡山のT字形石室もワニ氏に関係があるのではないかと一応考えられる。そういうふうに見える、ワニ氏は六世紀ごろには岩倉の盆地に墓をつくるほどの勢力を持ち込んでいたのではない。そしてさらに六七七十年ごろになると、おそらくワニ氏でもそのときのトップクラスだと思えますが、小野妹子の子供の小野毛人が墓をつくっている。いまのところそういうことが考えられますね。

それから、もう一つ重要なことがあります。このワニ氏というのがどういう種類の集団なのか、いわゆる日本的な集団なのか、それとも渡来集団かということです。『古事記』と『日本書紀』なんかから復元していきますと、どうも日本的なものになるわけですが、しかし発音が読んで字のごとくワニという、つまり日本に『論語』、『千字文』を伝えたといわれている王仁と発音がおなじだということ、『古事記』、『日本書紀』にはそう書いてあるけれども、やはり渡来集団ではないかということはいわれた学者もありました。現在のところわからないのです。あ

るいはひじょうに古い渡来集団ではないかという疑いもあるわけですね。そしてひじょうに古い段階で裏日本の、たとえば北陸のほうから、鉄の技術なんかを持ち込んできた集団ではないか、そういうことを推定する学者もおります。

そういう意味でもおもしろいのは、このワニ氏から遣隋使の責任者に小野妹子が任命されているということからも、推定されるように大陸文化をひじょうによく理解していた集団として扱われているわけです。たしか八世紀だったと思いますが、たとえば新羅のほうから使いが来たときも、通訳なんかはワニ系の人々が当たりもしている。ですから、奈良時代ごろの文献なんかから見ても、そういう朝鮮のことばがわかる、あるいは日本海を通じての航海技術をよく知っている集団としての扱いを受けている。

だから、そういう点でもおもしろいのは、これはワニの例ではありませんが、上賀茂神社の本殿の裏で、西暦六世紀ごろの、日本では福岡県の沖ノ島で出ているのと二例しかないわけですが、タコのいぼのように突出した飾りのあるガラスの容器が出ている、これはベ

ルシャの古いガラスです。そうすると、大和にもそういうものは入っていないのですから、何氏というのは別にしまして、やはり岩倉の一带にはたえず新しい知識や文物が入ってくる地帯でもあるということです。

鈴木 六世紀のT字形横穴石室や、七世紀

後半の小野毛人の墓についても、湖西地方の和邇中心の地域と関係づけて理解するのがいいんじゃないか、というお話だったわけですが、けれども、ちょうどその時期あたりから岩倉盆地の周辺で須恵器の窯が急激にふえていきますね、瓦の窯を含めて、かなりあると思います。これらは岩倉盆地だけでなく、鴨川をはさんだ西側の西賀茂を含めて、洛北古窯址群に入るわけですけれども、これらは生産地帯としてどういうふうに考えたらいいんですか。

古代の窯業地帯

森 京都市内では山科盆地はある段階では製鉄と須恵器づくりの両方をしていたわけですね。山科盆地の鉄というのは、先ほど言いましたワニ系諸族が湖西線沿いにおったわけですが、その湖西線沿いのたとえばマキノ

のスキー場や塩津のあたりとかにずっと古代の製鉄遺跡がたくさんあって、その一番西南の端が山科盆地なのです。山科盆地ではそういうふうな製鉄とそれから須恵器の生産をしている。ところが、製鉄や須恵器生産をやっている場所が天智天皇の御陵の場所としてある段階で取り込まれる。もともと天智天皇の御陵がいつできたかというのはなかなかむずかしいことで、墓をつくろうとしたら壬申の乱にあたっていますから中断したのではないかという説もあるし、壬申の乱が終わってからつくったという説もあるけれども、いずれにしても、微妙な年代はむずかしいですが、山科の鉄および須恵器の生産地帯が天智天皇の陵域に取り込まれている。天智天皇の御陵は上は八角、ベースは方形の古墳ですが、この古墳はひじょうに広い墓域、つまりぐるりの場所を取り込んでいるわけです。天皇陵としては一番大きな土地を取り込んでしまっているわけですね。だから、ちょうど天智天皇の御陵がつけられるころから山科盆地では須恵器生産はできなくなっているのです。ちょうど山科盆地で須恵器生産が消滅するころ、あるいは消滅させられたころ、バト

ンタッチするようにして盛んになるのが岩倉盆地なんです。もっともそのつなぎ目がそううまくいっているのか、あるいは多少ダブるのか、あるいは多少の欠落があるか、これは将来の問題ですが、大きくみれば、ほぼつながる。だから、だいたい古墳時代の終末期ごろになると、岩倉盆地でも須恵器の窯が出てくるわけです。ただ厳密にいきますと、国際会議場をつくるときに一つ古い瓦の窯が発掘されていて、そのなかに須恵器もいっしょに出てきた。それはいっしょに出てきたというけれども、厳密にみると、窯で焼くときに失敗した須恵器を瓦生産の階段状の台に使っている。だから、窯のなかから出てきたのは事実ですが、同時に焼いたのか、ちょっと微妙なんです。そういうのは先ほどの天智天皇の御陵よりは少し古い。だから、もう一度言いなおしますと、山科盆地でも須恵器を焼いていて、それが盛んなある段階から岩倉でもだんだんと土器や瓦を焼くようになって、そして天智天皇の御陵が山科につくられたころから、もっぱら岩倉が窯業生産の地帯になったと、そのほうが正確ですね。

七世紀の初めぐらい、別のことばでいいま

すと飛鳥時代から岩倉で瓦を焼いていた、それから須恵器も焼いた、そういう地帯になってくる。それから奈良時代ごろには、いまのところ瓦を焼いたのはあまりわからない、もっぱら須恵器生産地帯として出てくるわけです。そして土器の生産地帯として続くが、平安京が造営されるころになると平安京の瓦も焼いた。それから鉛の釉（うわぐすり）をかけたやきもの、つまり緑釉陶器といいますが、なかに須恵器にも釉をかけていますが、そういう緑釉陶器も焼くようになった。ですから、今日窯が確認されるものでは岩倉の緑釉陶器は日本でもひじょうに古いものです。この緑釉というのは大きくみると中国の唐のやきものの影響を受けています。唐のところにりっぱな鉛釉をかけたやきものを唐三彩ということばでいうわけです。

だから、平安時代になれば、岩倉の一带は平安京の瓦も焼き、そしてその瓦にも緑釉がかかった緑釉瓦がある。それだけではなくて、中国の唐のやきものを模倣した緑釉陶器も焼いている。緑釉をかけるだけではなくて、形まで中国の唐のやきものを模倣して、そして緑釉をかける。

「そういうふうに平安時代になりますと、この地方一帯が政府直属の窯業生産地帯になる。それを『延喜式』では瓦屋ということばであらわしているわけです。おもしろいのは、瓦屋を二つに区別して掌握している。一つが小野の瓦屋であって、もう一つが栗栖野の瓦屋なんですね。この点についてはまだもう一つ研究が進んでないのですが、遺跡の分布地としてみれば、ずっと切れないで岩倉盆地一帯に窯が続いているのですけれども、政府の掌握のしかたは、小野の瓦屋と栗栖野の瓦屋と二カ所に分けて掌握しておる。この理由がどういうことかは今後の研究課題ですが、先ほど言いましたように、少なくとも六世紀ごろにはこの地方で大きな勢力をもってたと考えられるワニ氏系の小野の名前が瓦屋につけられている。たぶん小野の瓦屋は今日のおかいらの森のあたりを中心にしていて、栗栖野の瓦屋が今日の幡枝一帯に残っているいろんな窯業遺跡をいつているのではないかと、というふうにだいたい考えられるわけです。

その後窯業がどういうふうにくるかという問題があるわけですが、極端にいうと十年は

ど前まで最後のかわけを焼く人が残っておりましたから……

それから最近ではさかんに京焼の陶芸作家が京都旧市内から岩倉、幡枝の周辺にどんどん工房を移しているから、巨視的にみるといまも切れずにやきものの地域として栄えているわけですが。

河野 明治時代まで瓦を焼いている人が何人かいたんです。木野にはかわかけの記念館のようなものがありますね。

楠木 問題は岩倉には粘土は出ないんです。岩倉川や長代川の影響で埋め立ててきまして、下まで厚い礫層なんです。だから、粘土の供給は岩倉ではむづかしい。鴨川扇状地とそれから高野川扇状地の周辺部に泥の層があって、狐坂下、いま公園になっていますね、ああいうところから供給される可能性はないでしょうか。そこでなぜ岩倉でわざわざ瓦などを焼いたのでしょうか。

鈴木 いまお話しした狐坂の下あたり、深泥池の東側を含めて考えると、江戸時代の初め頃の京焼の古いグループで御菩薩焼というやきものがありますね、かなり近いところに当然粘土を採取する場所があったと考えていい

んじゃないかと思うんです。仲村先生、中世で例の幡枝のやきもの集団が嵯峨の野々宮から移住させられたという記録があったように思えますけれど、どうですか。

仲村 あれは伝承ですけれど、そういうふうにいわれておりますね。北嵯峨から応仁の乱直後に移住したという伝説がありますが、私には信じがたいところです。

鈴木 岩倉の盆地に粘土がないんじゃないかというお話でしたが、国際会議場のすぐ北側あたり、かなり低湿地があるわけですね、大学の第四従規館ですか、体育の講義棟があります、あの地点の下を突はのぞいたことがあるわけです。建物を建てるときに堆積状況を確認するというところで、あそこは上になりの盛り土をして整地しているわけですが、下はしるい粘土でした。楠木先生、さきほどの話の砂礫の上下には粘土が堆積しているということですか。地点によっては浅いところにも。

楠木 岩倉盆地の地質についてはまだよく調べられていませんしよくわかっておりません。岩倉盆地の深さはだいたい五、六十メートルから百メートル以内だろうというふう

いわれております。岩倉盆地のできかたから考えて、泥というのは考えていけないじゃないと思うんですけれども、そんなに深くまで掘って泥をとるだろうかということですね。

それから古い大阪層群相当層と思われる粘土層が北のほうに少しあるだけです。ですけども、それは役に立つかどうかわかりません。だから、むしろどこから粘土を運んできて、作業場をそこに選んだという……

河野 西賀茂のほうはどうなんですか。

楠木 その辺はよく知りません、あるかもしれないですね。

河野 よそから運んできたにしては瓦窯趾が多いですね。

楠木 清水などは大阪層群の淡水粘土からとってやっておりますね。

鈴木 ところで、瓦を焼くということになると当然粘土も材料として重要なわけですが、もう一つ重要なのは燃料ですね。楠木先生の話のなかで、古墳時代あたりからマツが急にふえていくという植生の状況を描いてもあったわけですけど、やはりあの地域は材木を含めてかなり山の生産にかかわりをもっているかと思うんです。山の生産というか、

大都會の近郊にある「京のいなか」としての山の生活を含めて、仲村先生お話しただけですか。

京のいなか——経済と精神生活

仲村 いま土器生産の話が森先生のほうから出されましたが、平安京以前ないしは平安京以後、ミヤコの消費生活を支える平安京の郊外の村々の位置づけが問題になってきます。私は岩倉を含めて高野川の上流の莊園村落を、平安京が造成されて以後つかまえるために、二つの問題を考えたいと思います。

一つは平安京の経済生活、消費生活を支えるための人々の住んでおるところという点と、もう一つは平安京の人たちの精神生活とこのあたりの文化が規制したということです。精神生活の問題につきましては、天台仏教の問題から浄土教の成立の問題にかかわってきますが、この二つの問題をお話してみたいと思います。

まず平安京の消費生活を支える人々を考えます場合に、いま森先生から出されました土器の問題もそうありますが、燃料の問題が第一にあげられます。これは十一世紀の後半

の平安京ないしは平安京の周辺の人々をきわめて生々と描いた作品に藤原明衡という随筆家が書いた『新猿楽記』というものがあるんです。『新猿楽記』は、西京に住する左衛門大夫の息子、娘、娘の婿たちになぞらえて、当時の人々の生活をうつし出した作品なんです。第十三の娘、これはひじょうに醜い娘であって、その夫は、大原に居住する老翁で老岐大掾、名前は山口炭武といい、常に天の寒きを願ひ、とこしなえに気の暖くなるのを忌みきらって、せつせと働ぎ、彼らの生活はわずかに炭薪にかかっておる、といううなことが書かれています。こういう人たちが実は八瀬、大原にたくさん住んでいたのではないか。だから、それを山口炭武になぞらえて藤原明衡が描いたのではないかと思われるます。

それから、これはもちろん平安時代ですから、彼らの支配者というものが必ずいるわけです。この地域の支配者は比叡山や朝廷ですが、彼らは多くは供御人といわれます。その供御人の代表的な人物で山城国の八瀬刀禰の乙犬丸が寛治六年（一〇九二）に比叡山に訴えた訴え状があります。それによりまず

と、乙犬丸は年来八瀬の里の刀禰職——いまいえは村長の職であります——というものに任命されておって、ほかの雑役はまったく免除されていたが、近年になって杣夫役（森林を伐採する夫役）をかけられてきたので、ひじょうに難儀しておる。自分の息子の太郎丸は八瀬の村里の人たちとつき合っておって、座役を勤仕して、酒肴の役を六度もつとめておるんだ。ところがこれをつとめていない秦重行が一人前のことを言っているのはけしからぬ。われわれは刀禰職を勤仕し、座役をつとめておるから、杣役は免除されたい、と主張しているわけです。

実はこの史料は莊園村落のなかに座という、莊園村落のなかの一定の身分をあらわすひじょうに大事な指標を示すものですが、その座役が登場する、一番古い史料であります。これが八瀬に出てくるところに興味があります。つまり彼らは雑役をつとめておるからほかの国家的な諸役は免除されたいということなんです。特定の領主、権門勢家に従属して特定の雑役を勤仕する人たちが、実はここらあたり、高野川の上流のとくに八瀬、大原一帯には多いのではないかと思われま

す。

つぎに宗教の問題ともかかわってきますけれども、『今昔物語』のなかに北山の大原の奥山に住む餌取法師の話が出てきます。これは有名な話で大原山の戌亥（西北）の深山に住んでいる法師ですが、法師とはいいながら妻帯し馬や牛の肉（しし）を食らっておる。にもかかわらず庵（草庵）で弥陀念仏を唱えて極楽往生を願っておるとい話があり、法師が叡山の西塔の坊主の延昌僧正と出会い、自分が死んだ後に寺を建ててほしいと願い、死んだあと延昌はその庵のあとに補陀落寺——これは現在でもあとがあるらしいんですが——大きな寺を建てたということです。このように、炭を焼き薪をとり、馬や牛のしし（肉）を食しておるような人々が、このあたりに集住しています。こういう人たちの支えがあつてこそ平安京の消費生活が営めたということがわかります。

それからもう一つ宗教の問題ですが、北山の餌取法師の話は明らかに浄土教信仰のはしりを描いているわけです。叡山の麓でありますから、この辺には別院や里坊があるわけですから、大原、八瀬あたりには、現在でも村の規模に比べてひじょうに宗教施設が多く、これはかつて叡山の別院、里坊があった——現在ほかの宗派に変わっておるうとも——そういうふうな考えられます。そのなかでとくに興味をよびますのは、一つは文治二年の大原問答です。法然が、のちに天台の座主になる願真という学僧たちと、大原の勝林院で法論をたたかわせて、これに勝つわけです。法然には有名な俊乗坊重源らの弟子が三十人ほど、ついで、その討論を見守っているらしいのですが、ともかく一昼夜費やして法論を行つて、これに勝つ、こういうことですね。法然は叡山で学んだ僧です。そういう叡山のなかで育った浄土教が、この地域で実を結んでくるのです。常行三昧堂といまして、弥陀の称号を唱えるような施設も出てきます。

それからもう一つ。大原の^{しんぎやう}声明といまして、特殊な仏典の読み方、唱え方でありますけれども、これはのちに『平家物語』の平曲ですね、『平家物語』を琵琶法師が奏でるメロディーになってくるらしいんですが、そういうものもこのあたりで育ちます。

それからまた、有名な建礼門院の話であるとか、鴨長明が隠遁した話だとかいうこと

で、平安時代の終りから鎌倉時代の初めにかけて、天台のなから浄土教が生まれる環境をこのあたりがもっている点が、平安時代から鎌倉時代にかけての経済の問題とともに、精神生活の問題で重要ではないかと私は思っています。

文学とくらしの舞台

鈴木 なるほど。みやこの暮らしを支えている、信仰生活をも含めてその舞台にもなっている、というようなことですね。いま中世までお話しただいたわけですが、あの地域を舞台にしてはかの分野、たとえば、文学の世界でもかなり出てくると違いますか。例の『枕草子』あたりに出てくる山の話、鞍馬山なんかも例の坂のことを「近うて遠きもの」、あれ『枕草子』でしたな。

河野 私は古い時代の文学についてあまり詳しくないんですが、おっしゃるような作品とか『平家物語』とか『平治物語』、それから『義経記』……。牛若伝説がいちばん多いかも知れませんね。それから和歌、和歌ではいろいろたわれていきますね。

鈴木 岩倉の大雲寺ですか、あれは『源氏

物語』に登場するのと違いますか。

河野 光源氏がお、こりにかかって、北山の寺の行者に治してもらおうというくだりがありますが、そのお寺が大雲寺かどうか。鞍馬寺じゃないかとも言われています……。ただ、大雲寺は古くから精神病にはきくと言われてきたようですね。

鈴木 たしか大雲寺には平安時代の天安五年（八六一年）の銘のある国宝の鐘がありますね。

仲村 平安時代の貴族のなかではこの辺が保養地として考えられているようです。事実、貴族の山荘や別荘がたくさん建っておるようですね。それは風呂の問題と関係があると思います。これをお話してよろしいですか。

鈴木 どうぞ、お願いします。

仲村 いまでは岩倉は京都の盆地よりも一つ寒いような感じがしますけれども、空気がいいのと環境がいいということで、だいたいい京都では岡崎から北白川、それから洛北の岩倉盆地の周辺に、公家それから院、女院の別荘が建つわけなんです、一つはレクリエーション、たとえばマツタケ狩りなどが行わ

れています。足利將軍などはよくこの辺へマツタケ狩りに出かけておりますが、実は目的はやはり風呂だと思われれます。いわゆるかま風呂なんですね。かま風呂の起こりはいろいろと説あると思いますが、次のように信じております。近世の中ごろに黒川道祐の『雍州府志』に出てくる記事ですが、こゝろあたりの生産物として薪、炭がありますが、炭と薪のちょうど中間に黒木というのがあります。これは炭じゃないんです。といって薪でもない、その中間なんです。木を炭のかまどに入

れて蒸焼きにするわけです。かまどから黒木をとり出したあとに草の葉などを敷いて塩水を打って、そこに村人が入るといふ、これがかま風呂の起こりと思われれます。

余談ですがけれども、実は十数年前に、八瀬に現在料理旅館が二つ、三つありますが、ある旅館が片方をかま風呂の特許問題で訴えかけたことがあるんです。訴えられた方を知っていたものですから、相談をうけた私はそんなものは昔からあるから特許の対象になる問題ではないと言ったことがあります。つまり黒木をとり出したあと、かま風呂として利用されるのです。これは発汗療法です

ね。汗を出して新陳代謝をよくする、いわゆるサウナ、むしろ風呂で、こういうことが公家の山荘ができることと結びついたというふうに思っております。

河野 大雲寺は、土地の人その他の人たちからも観音さんと呼ばれていましたね、観音信仰と結びついているんです。信者が多かったようで、岩倉盆地の周辺の古い道の角々には、「右くわんのんみち」と書いた石の道標がいまでもあちこちに残っていますよ。観音信仰がだんだん衰えて、いまはほとんど参る人もない。先ほど鐘のお話が出ましたけれども、古いいい石仏もありますね。ずいぶん古いしかも大きい寺だったと思います。実相院も大雲寺の境内の一部だった。その滝に打たれるとか智弁水というお水を飲むと、物の怪に憑かれた人とか精神病が治るといわれるようになって、観音信仰と結びついてたくさん人が来るようになった。蕪村の句に「岩倉の狂女恋せよほととぎす」というのがありますが、お籠りしたり長期療養者もいたわけですね。そういう人の必要から旅館が観音さんの下にでき、明治初年に病院になった、それが岩倉病院のはじまりなんです。仲村先生が

言われたように、環境がよかったわけでしょうが、庶民の信仰と結びつくところが面白いですね。

鈴木 いまお話しの大雲寺にすぐ隣接している石座神社、あれが岩倉の地名の起りですね。元来は、北岩倉で、東山の東岩倉とか西山の西岩倉にたいしてのもですね。

ところで話題を変えたいと思います。まず食べ物なんかに。つけものでおいしいのがあるそうですね、例のあれば、古い記録にもあるんでしょう。

河野 しばづけですか。

鈴木 しばづけでなくて、「木の芽づけ」マタビとかアケビ、ニンドウなどをみじん切りにして塩でつけるものだと聞いているんですけれど。

仲村 そうなんです、黒川道祐の『雍州府志』にも出てきます。

むこうのほうに京都の人が行くことというのは、一種のレクリエーションということもありましょうが、とくに応仁の乱以降京都の町中で焼けた寺院が移転いたします。その代表的なのが、いまの白峰神宮の裏側の実相院町にかつて実相院があつて、応仁の乱で焼け

て、この地に再建される。実は三千院もともとからあったんじゃないくて、もとの常行三昧堂に三千院が入っていくわけです。ですから、京都で戦乱があつて寺院が疎開するには以前からこの辺と関係をもっておった人が、寺院の建設を誘導したのだと思います。

河野 山に囲まれた不便な所だったでしょうにね……。若狭街道は平安中期にはすでにあったようですが、明治期だけで三回大修繕している、よい道ではなかったようですね。先ほどの文学の話ですが、たとえば、「都に

も初雪ふれは小野山のま木の炭かま焼まざるらし」(相模)とか、「山城の小野の山へと里とをみかりの宿をも鳥ぞ鳴くなる」(能宣)その他「小野山」をうたった和歌がかなりあります。「小野霞」などという言葉もある。ですけど、それが今の大原をうたったものだと断定しうる根拠はあまりないんじゃないかと思うのです。森先生のお話にありましたように、和珥氏というか小野氏というか、そういう氏族の勢力圏と関係がありましてね、「小野」という名のつく土地や場所が洛北、北山一带にかけて随分ある。北区の小野郷から東一帯ですね。岩倉の近くにも小野畷、小

野橋、小野瓦窯、小野神社などいくらでもあるんです。私は、京の都から北山を眺めて、詩心をそられた歌人たちが、岩倉あたりから北の方面をいろいろたつたので、「小野山」といっても特定の山ではないのではないかと考えたいですね。むろん全部そうだとは言いませんし詞書でもあれば別ですが……。

いまでも、鴨川の橋の上から眺める北山は美しいし、四季を問わず詩心や想像力にうたえてくるものがありますよ。

想像力にうたえてくるという点では、たとえば牛若丸伝説とか市原野の盗賊とか、天狗とか、そうした題材の物語文学は想像力によるフィクションの産物だといっているんじゃないでしょうか。『平家物語』だって、想像による潤色がかなりあると思いますね。岩倉でさえ滅多に行く人もない僻地だったわけでしょう。ましてやそこから北の方になりましてとねえ……。北山の景観は足を踏み入れたことがないだけに、いっそう文学的喚起力をもつわけですよ、そう考えたいですね。明治期になって、たとえば与謝野寛と鞍馬寺の関係などになると、これは別ですが……。鞍馬寺の先代管長が寛に和歌を学んだ、つまり子

弟関係なんです。

そのことと直接関係はないかも知れませんが、岩倉あたりから北の周辺は、文人、学者、公家などの隠棲の地でもあったのではないのでしょうか。市原には儒学者の藤原惺窩がいた。そしてその北の二ノ瀬は、彼の弟子の林羅山が幕府からもらった土地だったそうで、土地の老人たちは、今でも「林先生」と言うんです。「林先生の山林の管理がこの村の衆の仕事で、それで食べさせていたっていた」と。羅山の遺跡、たとえば「奉先堂碑」とかそういういたものがあり、旧家には羅山の文書が残っている。ただし、羅山は惺窩のように山荘に籠っていたわけではありませんが……。それからずっと南へ下ると一乗寺に、やはり惺窩の弟子である石川丈山の詩仙堂がある。岩倉あたりにも山荘らしいものがある。若干あったらいいんです、確実な名は残っていませんが……。

長谷に通称「朗詠谷」という所があります。ここに山荘をむすんだ藤原公任（平安中期の歌人）が『和漢朗詠集』を編纂したと言いつた。公任ではないにしましても、誰か

隠棲していた、そういう土地だったのではないかと思うんです。

隠棲という点で注意したいことは、岩倉、市原あたりから北には、そういう史実も遺跡もほとんどないことです。積雪と関係があるという人もいます。

森 岩倉の土地は、先ほど途中越えの交通のこと言いましたが、北へ抜けて行くと花背を越えて、花背まで抜けるとあとはいろんなところへ行けますね、若狭へも行けるし、丹後のほうへでも丹波のほうへでもいける。だから、ひじょうに交通の便利のいいところ、いろんな大小の集団が入っておる。だから、賀茂とかワニ——ワニのうちでもとくにこの場合は小野ですね——比較的稳定はしていたでしょうけれど、それ以外にもいろんな集団の存在をたどることができますね。

たとえば、いまひとつ思い出したのは土師氏もどの程度おったかわかりませんが、たしか「造寺所公文」に出てくるんです。だから、長期安定していた集団と、それから短期間入ってきた集団とは将来分ける必要があるということ、これが交通路から考えた一つの問題です。

それから、先ほどのかまぶろのこと、私はいへんおもしろかったわけですが、つまり製鉄をやる、それから須恵器を焼くという地帯では、しばしばいっしょに木炭がまが最近発掘されているのです。つまり鉄を溶かそうと思うと、付近で木炭を生産しないと鉄はできにくいわけです。だから、極端にいうと、いままでも木炭がまを製鉄がまと誤認していたこともあったぐらい、その三者がひじょうに密接な関係で発達してきている。木炭がまというのは基本的には須恵器の窯と構造は最初いっしょだったわけですから。そうすると、須恵器の生産地帯や瓦の生産地帯——ただしここはちょっと誤解のないようにしていただきたいですが、須恵器や瓦の生産地帯といっても、今日の瀬戸とか伊万里のように毎日多くもくと煙が上がつておったのではないわけです。一年に一回とか、あるいは瓦の場合は平安京をつくるようなときにどつとどつと、あとはやらない。遺跡ではいっぱい各地にあるわけですけど、今日の窯業地帯のイメージでみるのはちょっとだめでしょうし、それから、先ほど言い落しましたが、平安京の瓦は何もここだけでつくっているのではなく

て、淀川の大山崎と高槻の如意谷の窯址、それから吹田へ入った岸部の窯址など、淀川の水系でも焼いていて、緑釉瓦も作っている。そしておそらく船やいかだでもってきたわけですね。ですから、そういうところでも生産しているし、それから平安京での生活がだんだん軌道にのってくると、緑釉陶器も岩倉でつくっているのはごく一時期で、すぐに名古屋のほうへいってしまふ、愛知県のたとえば篠岡へ生産が移っていく。それから土器土産の大勢は愛知県の猿投^{さなげ}へ移っていくわけですね。ですから、ここの生産はやはり平安京の薪なんかの需要が大きくなれば存続はしているとはいえ小規模なものに変わっていくわけですね。しかし、そういうなかですと窯の伝統と、それから人間の健康保持法というものがいっしょになった和製サウナぶろといましようか、それがあったのは、おもしろいですね。

鈴木 平安の終わりごろ、一一〇〇年代の後半ですか、大極殿が焼けて、もう建てられない、その時点で、あの地域の瓦窯が消えま

すか。
森 もう少し前じゃないかな。藤原道長の

法成寺の造営のときは、丹波の亀岡周辺が窯業の中心になっている。法成寺の大造営のころから次第に亀岡地域に瓦生産が移っていくし、愛知や香川などからも瓦を運んでくるようになる。

鈴木 そのあとのやきものというところ、鞍馬寺の経塚でも、花背の経塚でもそうですが、常滑焼が使われていますね。経筒の外容器として。

仲村 焼物の原料が問題なんですけれども、『洛北誌』の岩倉村の項を見ますと、応仁の乱以後北嵯峨から土器づくりがここに入ってきたのは、非常によい土を発見したからだと書かれていますね。

鈴木 野々宮から移るときにそういわれていますね。そのあと江戸時代を経て明治の初めくらいまで焼いているということですね。

楠木 粘土の問題とそれから森林の問題、炭で焼くわけですから、その問題とがあつて。

鈴木 暮らしを支えていく上で窯業は重要な位置を占めているわけけれども、あの地域ではかの産物というところ、たとえば鞍馬石なんかありますが、火打ち石もあそこから京都

の町へ持つてくるんですね。

河野 それから有名なのは貴船川の螢石。

鈴木 それに賀茂川の赤石ですか、青石ですか、中世の庭づくりいろいろ使われているようですが。

仲村 正保二年（一六四六）、これは江戸幕府成立直後ですが、松江重頼は例の俳諧の『毛吹草』に全国の名産品を書き上げているんですが、該当のところをちょっと読みますと、幡枝の土器、鞍馬のところが、山椒の皮、火打ち石、大原の菩提子これは菩提樹からできる念珠です。それから杉丸太、市原の笹の葉、これは洛中のちまきに用いる。それから八瀬の黒木、こういうものがありますね。これは近世の初めですから、中世にある程度測って考えていいと思うんです。

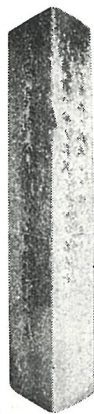
里子制度の伝統

鈴木 ところで例の里子制度ですが、里子というところよく岩倉を挙げるわけですから、当然中世まで溯るわけでしょう。

仲村 里子制度は、例の『京都の歴史』の中世のところに一カ所だけ出てくるんですよ。そこだけにしか出てこない。貴族が岩倉

の村人に子供を預けたということが書いてあるんです。ところが、有名な井上頼寿先生の『京都民俗志』には「里子」というところがあるんです。それを見ると、京都では高貴な方々の子を幼年の間だけ北白川や岩倉、梅ヶ畑などに里子にやる習慣がある。その理由は、子供が親とともにいると、目をかけずぎてかえって柔弱に育ててしまうので、空氣の清い田舎へ養育を頼んだのである、中でも岩倉の地は氣候がよく、四神相應の地である——ゲンがいいというわけですね——ということで盛んに行なわれた。天台の勢力があったことも一原因らしい。伝説によると、四条大納言公任、これは藤原公任のことです。検非違使の長で有名な人ですから、この大納言公任が万寿年間に岩倉に里子にやってある娘のところへ頼って行って、念仏三昧に日を送った、こういうふう井上先生は書いておられるんですけれども、これだけの理由で里子の制度を考えるのは、ちょっと……。

杉井 里子に関連して申しますと、岩倉具視が岩倉へなせ隠棲したのかということをとだつてみると、『岩倉公実記』には何もそういう由来は触れられてないんですけれども



岩倉具実乳夫の碑

も、岩倉具視の遺髪を岩倉村に納めたことを記念する岩倉公旧蹟保存会印行の『岩倉村と岩倉公』によると、岩倉具視は文政八年九月前権中納言堀河康親の第二子として生まれたのですが、天保九年六月十四歳のとき、岩倉具慶の養子となる。その間岩倉村の三四郎という農家に里子に出されたんですね。それで里親のところを頼って岩倉に行ったらいいんです。いわゆる和宮降嫁事件とか、あるいは文久二年の幕政改革の進言とか、幕末風雲急を告げた際、彼は公武合体の元兇と目され、岩倉は奸物だとされ、反対党によって蟄居、解官、落飾を命ぜられた。反対党はそれでも足りないとして、彼を流謫しようと画策したので、彼は難を避けてどこへ逃げたかという、西賀茂の靈源寺にかくれようとした。

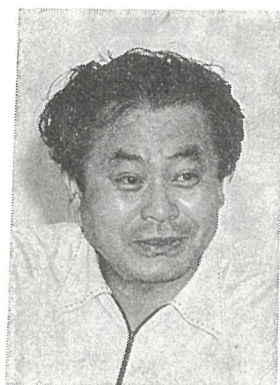
鈴木 正伝寺の北側ですね。

杉井 そこは岩倉家の菩提寺なんです。ところがそこは岩倉の謀臣たちと近い所にあっ



楠木 幹浩氏

て、そこはかえって画策を疑われるということになって、居所を求めて右往左往する。西芳寺に逃げたり、岡崎の永観堂へ行ったり致します。そして結局行き着いたところは里親の岩倉村の三四郎を頼って行った。『岩倉公実記』では、洛北岩倉村藤屋藤五郎所有の庵を借りて、文久二年十月八日をもってここに移るとある。いま三四郎という人を先祖にもつ家というのは調べておりませんし、藤屋という家もわかりませんが、岩倉具視があそこに隠棲したということは、仲村先生のいわれたように、平安時代から隠遁の地、あるいは山荘のあったところ、あるいは、いわゆる禁裏御料と関係のある土地ではあるけれども、もっと直接的な動機は岩倉具視が現実そこに里親がおり、そこを最後に頼って行



森 浩一氏

ったという因縁があるわけです。そしてもう一つ、藤屋という家のことなんですけれども、さっき河野さんいわれたように、長谷観音にお詣りする病人がいるんですね。その病人の下宿というか、止宿所に藤屋はなっているんです。そこへもぐり込んでいると、岩倉を訪ねてくる者は、心身障害ののだといって訪ねてくるわけです。そうすると岩倉は会えるわけです。ところがあまり探索がきついたので、藤屋は岩倉に出て行ってくれと言うんですね。そこで、口をきいてくれたのが実相院門跡坊宮芝坊澄昇という者で、ようやくそこにとどまることができた。彼は慶応三年十一月許されて京都にかえるわけですが、その間五年岩倉に隠棲することになる。ですから、私は話をとって申しわけない

けれども、岩倉具視がたまたま縁をもって移り住んだ岩倉という所は、非常に長い間の京都の里親・里子の制度がずっとつながっていて、明治維新のいわゆる回天の事業はそこで生まれてきたということですね。

森 ぼくはおもしろいと思うのは、たとえば奈良時代より少し前ですけども、河内の古市の東のほうの国分、そこは田辺氏の根拠地ですね。その当時全国的に見ても文化のたいへん盛んな所です。そこに子供のころ預けられていたのがのちの藤原不比等で、不比等の名前は田辺史の史からきているというのは、古代史で証明もできないけれども、また否定もできない説のようです。そうすると、奈良時代、あるいはそれ以前においても、豪族や貴族たちが子供の教育を、勢力もあり学問的にも進んだ地域の集団にゆだねるといふ、そういう制度は古くからあったかも知れませんね。そういう制度と岩倉の里子制がどこかで続いているのかどうかですね。

もう一つおもしろいのは、さきほど触れたようにワニ氏・小野氏というのは、奈良時代ごろには大陸の言葉も理解するも、新しいものを吸収している集団ということですが、そ



仲村 研氏

ういう伝統が中世・近世になってもどこで生きて、どこで切れているのか、この研究は将来やってみたらおもしろいでしょうね。

仲村 里子制度でやはりいちばん大事なことは、禁裏御領とか、公家領であるということですね。それが一つのポイントだと思います。それから公家の側としては、娘だったら門跡寺院に尼として入れる。男でも入れますね。そういう公家の子供の処理——と言ったら何ですけれども、その一つとして里子制度が出てくる。それが公家にとどまらないで、一般に京都の庶民に……

杉井 私の知人にもいるんですよ、小さいときに岩倉に里子に出されたというのが。

仲村 だいたい前に法学部の井ヶ田先生が里子制度の江戸時代の文書をだいたい持っておら



杉井 六郎氏

れましたが……いま海外に行っておられるので聞けませんが、非常に特殊なものです。

杉井 同志社高校の総合調査のときにも里親・里子のことを調べたことがあったと思う。それによると、昭和の十年代くらいまではやはり町の人の子供をよく預っていますね。

仲村 お金をつけて契約書をかわしてね。一年いくらというのを契約書に書いています。

杉井 その里親・里子ということに関連して、従来の岩倉の性格を特色づけているのは、その職業にあります。その主たる生業が農業にあることはいまでもないことです。が、その外市役所、市の水道局、それから京大というような、いわゆる公のところに勤め

る人が当時の岩倉の人口で非常に多い。さつき森先生のいわれたように、それはあるところで切れるわけですが、それでも、案外連綿としてつづいているものも岩倉にはあることを感ずるのです。

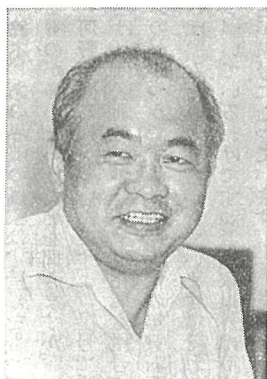
森 何歳ぐらいまでということ、その契約期間内に何か具体的な読み書きそろばんとかある種の教育をやるのですか。

仲村 田んぼへつれていって自分の子供といっしょに遊ばしている。言うことをきかんとときには木にくくりつけたり、その家々のやり方があるんでしょうが、井上先生はそう書いています。

楠木 岩倉に特に里親の制度があったのですか。それとも預けるところが各地にたくさんあって、その一つが岩倉なのですか。

仲村 岩倉にそういうものを受け入れてくれる家がたくさんあるわけですね。

杉井 それからもう一つ、さつき岩倉具視の話をしたんですが、岩倉具視はあそこに住んでいる間に、いわば維新回天の画策をするわけですけれども、そのときに一山越えた日吉神社に玉松操という人が住んでいるんです。かつて同志社高校の生物の講師をしてお



河野 仁昭氏

られた玉松公叙先生はそのお孫さんになる。玉松操は山を越えて来て岩倉のブレーンになっていますね。そのなかだちをするのは三宮義胤、それから『岩倉公実記』の総読者の香川敬三ですね。この男は、岩倉が隠棲していたころには鯉沼伊織という名前で岩倉の傍にいた男です。こういう男が幹旋をして、当時滋賀県にいる玉松操をひっぱってくるんですね。そしてよくいわれるのは、王政復古の号令のなかに「神武創業之始ニ原ツキ」というのは玉松操が挿入した文章であって、岩倉の草案にはなかったといわれているわけです。私も高校に勤めていたことがありますから、玉松先生とも話をする機会がよくあったんですが、玉松操のことをおうかがいすると、先生は非常にお喜びになって、玉松操の



鈴木 重治氏

短冊をいただいたこともあります。なにか縁があるものですね。
鈴木 いま岩倉具視に関して近世のあの地域の暮らしを含めてお話をいただいたんですけれども、どうやら里子、里親制度について見ても、明治・大正・昭和に受け継がれている。一方、あの地域はいつまでも田舎ではなかったわけで、新しく開発されていくなかで、まさに都会の一部を見るわけです。それを生み出したのはやはり同志社が進出してからというふうに理解していいんですか。
杉井 同志社高等学校の愛唱歌のなかに「白鷺飛び交う岩倉の野に、清らかにたたりわれらが母校」という一節があります。私が大学に来ましたのは昭和四十年ですが、そのころまで、まだ岩倉校地には白鷺が飛び交っ

ていた、柳が青めいて水が湧いていましたよ。

鈴木 田園的な景観がかなり残っていたわけですね。

杉井 だから、いま鈴木さんがいわれるアーバンゼーションの進んだのは、もつとあとじゃないですかね。

鈴木 岩倉が開けていくのはやはり足の問題で、京福電鉄の開通ですか。

河野 電車の開通はあまり関係がなくて、むしろこの十数年来の、いわゆる宅造ブームからではないでしょうか。昭和三十五、六年頃、京福の茶山駅あたりから北は、まだ田圃でしたよ。修学院がちょっと賑やかで……。

楠木 明治以後の京都の市街の発展を見ると、周辺部はかなりの地域が田んぼだったんですね。

仲村 手もとの『愛宕郡誌』の岩倉村のところを見ると、これは明治の終わりごろじゃないかと思うんですが、岩倉が二七戸で一六九五、長谷が六三軒で四三七人、花園が五一軒で二四八人、幡枝が二九軒で二〇七人、中が一九軒で一六二人、やはり岩倉村のなかで圧倒的に大字の岩倉が多いですね。

鈴木 あゝの界限の農家は、屋号をもっているものが多いということを聞きますが。

河野 同じ姓が多いんですよ。屋号で呼ばなければ区別がつかない。現在でも屋号で呼ぶのがふつうですね。江戸時代の年貢石高調べは、みな家号で書かれています。それ以来つづいているわけですね。農家以外は商売の名が家号になっています。

仲村 深泥池を上がって幡枝に入っていく切通しがありますね。あれは深泥池の住民で吉三郎という人がほとんど独力でやるんです。貞享二年、江戸時代の前半ですが、それ何の必要からやったかというと、薪炭の運搬なんです。そういう商売をやっている二、三の人が援助をしてやっています。

河野 どの程度一般に利用されたか知りませんが、下鴨神社の東側に御陰橋がありますね。あそこから御陰通を抜けて上終町あたりから一乗寺、そして修学院離宮の下あたりを通過して比叡山麓の御陰神社まで通じている。むかしの御蔭祭はこの道を通ったのではないかと思うのです。相当古い道ですね。上高野から岩倉へも通じています。

鈴木 古い道と云えば例のカキツバタの大

田神社ですね、あれから東に入ってから北へ抜ける道が鞍馬越えの道です。狐坂の一本西ですね。あそこあたりが古い道で……

楠木 ところで、文化財がいろいろありますけれども、開発が進むと失われていく。深泥池の問題でもそうですけれども、道路建設で地域が開発されると自然が破壊されていく。やはり価値あるものならば保護する必要がありますがあるわけですが……

鈴木 たしかにあの地域の自然的な景観、また歴史的な環境を保護していくというのは重要な課題ですね。道路で遺跡がつぶされたり、国際会議場をつくるときにもすでに窯跡がつぶされたという指摘もありましたけれども、開発が進みますと、とくに宅地造成で文化財がつぶされていく状況が目前にあるわけですから。歴史的な環境も含めて保存したいという気持ちが強くなるわけです。

最後になりますが、たまたま同志社が岩倉に校地を得て教育・研究活動を開始してちょうど五十年になるということなんですけれども、あそこの土地を同志社が求めたいきさつといましようか、その前後のことをここで評価し直してみる必要もあるんじゃないかと

いう気もするんですが、その点いかがでしようか。

同志社と岩倉校地

杉井 詳しいことは別にして、私の思いますのは、百年を過ぎた同志社のいわゆる地所史というものを見ますと、当初ここ今出川が約七〇〇坪ぐらいですね。社史所蔵の「湯浅治郎関係文書」というのを見ますと、前橋、新潟、鳥取、宮崎というようなところに地所がたくさんあるんですね。びっくりするくらいなんです。『同志社五十年史』にも累年資産増減表というのが掲載されていますが、それを見ますと、新島先生の亡くなられた翌年の土地の総坪数は三万六六七五坪、そしてこれが累年ふえてくるんです。これがガタッと減りますのは、明治四十四年、原田助社長時代ですね。この時期に湯浅治郎さんが資産管理をやって、たくさん土地を売るわけです。たとえばこの近くでいいますと鞍馬口、それから鳥取、宮崎、前橋、仙台、新潟、そういうところをどんどん手放しまして、学校の施設費に切りかえていくわけです。そして分散していた土地を縮小して内部充実を図ろうとす

るんですね。その内部充実がじつは同志社における原田社長の中興時代です。ところが、どういことが出てきたかというと、大学令による大学に生まれかわる、そうなるとう学生数がふえてくる。学生数がふえてきたら、今出川の土地に集中していたし、これではどうにもならなくなった。そういう背景があった、閑静な土地という条件と、それから比較的近くということで、岩倉の土地が勘定項目に上ってくるのは昭和八年からでしたかね。その経緯などについては河野さんからお話をいただければと思います。

鈴木 同志社の百年史をひかえて直接お仕事をされておりますし、河野さん、データを出示していただけますか。

河野 大正九年四月から同志社は大学令による大学に昇格しますね。それまでであった専門学校令による大学をどうするかという問題があった、大正十一年四月に同志社専門学校の認可を得まして、まず神学部と高等商学部を夜間で開校する。昭和二年から政治経済部と英語師範をやはり夜間で開校します。ところが、そのころ、京都には商業学の高等教育をやる学校が同志社しかなかったので、応募

者がずいぶんあるわけです。不況のときでもあり、時流に乗った感じですね。大正十三年に高商部は昼間に切りかわるわけですが、やはり志願者がたくさんある。学生は多いのですが、教員はほとんど大学の学部の先生方のサイドワークの形だったんです。施設設備なんかも不十分で……。そのころ、大学は毎年赤字で、その赤字補填に高商部の利益金をまわすわけです。そんなこともあったりして、高商部の学生は、自分たち専用のグラウンドとか建物を確保してほしい、自分たちは四万円寄付するから、それに四万円以上の金を学校が足してぜひやってほしいという要求を理事会へもってきた。大正十二年三月に高商部専用の木造二階建の徳照館を建てましたが、全員登校すると、四分の一くらいは立って授業を聴かなければいかんという状態であつたらしいんです。理事会としては高商部学生の要求を受けて立たざるを得ないことになった。海老名総長は拡張政策にはあまり乗り気ではなかったようです、日本全体に不況の波が押し寄せつつあったことにもよるでしょうが。しかし、高商部の学生は、学生大会を開いて決議をし、学友会の委員が中心になつ

て、総長宅をはじめ各理事の家を戸別訪問して口説いてまわるとか、募金活動をはじめるとか、どんどん動き出す。学生の全員一致のそういう熱情と活動が理事会を動かしたわけで、当事学生だったOBは、今でも誇らしげに当時のことを語りますね、「わたしたち学生がやったんでっせ」と。

理事会では、理事であり財務部長だった西村金三郎さんが中心になりまして、大山崎周辺、山科、岩倉の三つの候補地について検討した結果、岩倉が最適だという結論を出した。理由は閑静で勉学の地に適しているというところが第一番。西村さんは同志社普通学校を卒業して仙台の二高に学んだ人ですが、彼が普通学校にいた頃は、御所と相国寺の森の間にあって今出川校地は閑静だったのだが、道路の拡張と人馬の往来で、昔日の環境はそこなわれてしまったというわけです。生徒数も、全学で約五〇〇〇人になっていた。ついでに申しますと、そのころの今出川校地の面積は約二万坪、うち五三〇〇坪は相国寺からの借地で、その地上には建物を建てない約束になっていたんです。

岩倉の新天地は、閑静だという以外に、風

光明媚だということをあげている、比叡の眺めとか北山連山の姿とか。それから、新島先生と因縁の深い岩倉具視の旧蹟地であるということ、そして、これはちょっとおかしいんですが、子供を愛する多くの親が信仰している三宅八幡宮の近くだ、八幡宮を信仰する親は、その子を岩倉の地に勉学のためにすすんで送ってくるはずだ。(笑) 西村理事は、そんな説明をしています。

昭和二年十一月に理事会は移転を決定し、翌三年十二月十六日に評議委員会がありました、そこで理事会の案が最終的に決ったわけですが、その記録によりますと、買収校地面積は約六万坪、坪単価約八円。買収費は西村理事が北白川の自分の宅地約一七〇〇坪を抵当物件としまして、大沢徳太郎、小林正直、津下紋太郎の三理事が個人の資格で連帯保証人になって、三井信託会社——「会社」と記録に載っております——から四十五万円借りました。同志社は信用がなくて、銀行は金を貸さないんです。(笑) それで個人名義で借りたんですね。その時点で、学生の募金は二万六五〇〇円だったそうで、学校は寄付として受け入れています。それから、交通の便は、昭

和三年に開通したばかりの鞍馬電車がありませんた。

買収の対象になった土地の持主は八十七名なんです。折衝は大変な苦勞だったろうと思いますね。これは私の想像ですが、あの辺は湿地帯であまりよい田圃ではなかったということもあります。昭和初年頃にはすでに、都市近郊農村としての性格を岩倉は多分にもつようになっていて、米作とかの仕事に従従する人が少なくなりつつあったのではないかと、京都市内まで自転車で三十分から一時間以内で通えますから、市内に勤めるとか、野菜や薪など換金作物の栽培と行商ですね、そういう人が増加して、米穀に対する依存度が低くなっていた、つまり、専業農家が減少しつつあったのではないかと思うのです。上高野は若狭街道沿いだということもあります。岩倉よりもっと早くそういう傾向が進んでおりますね。

話をとへ戻しますが、そういう岩倉の土地を西村さんは買ひまして、昭和四年三月に樹徳館が竣工して高商部は移り、間もなく同志社高等商業学校となり、定員も九〇〇名になる。教授スタッフもだんだん充実いたしま

して、特に中川精吉先生(高商部部长)の後任として高商の校長に就任された鷲尾健治先生(初代校長)は、高等商業の教育者としては学識経験とも実に豊富な方で、この方の貢獻が大変大きかったと思います。いわば同志社高商の校風とでもいうべきものを、岩倉の地につくり上げられたわけですね。

土地の方は、西村さんの当初の計画では、六万坪のうち三万坪を残しまして、残りを造成して学校に関係ある商店、たとえば文房具店とか食堂などのほか教職員住宅として分譲しまして、その利益で借入金返済をする、同志社には一銭も迷惑をかけないということで、先の評議会で承認を得ています。しかも、学生の寄付以外に、寄付にも頼らない。樹徳館を建てていたとき、たまたまアームスト大学のキング総長が来学されまして、寄付を申し出られた。西村理事は「寄付はいただかない方針なので、あなたに土地を提供するから学生のために何かしてやって欲しい」と言って、キング寮を建ててもらっている。しかし、間もなく西村さんは同志社を去り、理事会はその後でできるだけ沢山土地を残しておきたいという方針に変わりました、未処分の

土地を小林、大沢両理事と、大阪の会社の社長と三名の名義にもらったり、小林理事の尽力で銀行の借金を延べ払いにし、利息も安くしてもらって、昭和十六年にようやく同志社校地になった。昭和三十年頃の面積は約四万三〇〇〇坪ですから、処分したり農地改革で手離した面積は約一万五〇〇〇坪でしうか。

現在とはご承知のように高等学校が高商の跡へ移っていますが、これは昭和二十四年のことで、高商の後身である経済専門学校が大学の商学部になって今出川校地へ帰った、その入れ替えのような形ですが、山田貞夫先生が高校の校長で、岩倉移転については随分積極的だったようです。昭和二十二年三月に新学制によりまして男女共学の中学校と高等学校が発足しますが、最初は今の中学校に同居していた、志願者は多いんだけど一学年三クラス以上は収容できない、そういう問題があったようです。山田先生はその打解策と、高校教育について独自のヴィジョンを持っておられたようです。

それから、長くなりますが、高校に醇化館という古い建物がありますが、あれは御大典

のとき御所に造られた建物なんです、西村さんが折衝して払い下げてもらったものなのです。西村さんのご遺族からご寄贈いただいた西村さんの「ノート」にいきさつが詳しく書かれています。その建物に、動物の剥製など標本がたくさん陳列されているはずですが、あれは、明治末期から永年同志社普通学校の先生をしておられた加藤延年先生が、ほとんど個人のご努力で明治末期から収集されたものの一部なんです。生物学の授業に使っておられたわけです。それが、一部分にもせよさいわい残っている。加藤先生がそういうコレクションに着手される前、明治二十五、六年頃から、同志社は宗教博物館をつくろうということ、宗教に関係のあるさまざまな器物を寄付などによって収集した。それは散逸してしまつて、僅かに記録が残っているだけです。

先ほど、遺跡や環境の保存の話がでしたが、単に遺跡や環境だけでなく、地域や学内のさまざまな器物、寄贈・収集品、記録なども、もっと体系的組織的に収集・保存・管理をする必要があるんじゃないか、いままであまりにもなおざりにしすぎたんじゃないかと

思いますね。

鈴木 ちょうど昭和三年前後のお話で、同志社が岩倉へ展開していくというときに、学生が中心になって教育・研究条件を整備しろという形で動いていたという、非常におもしろく伺いました。

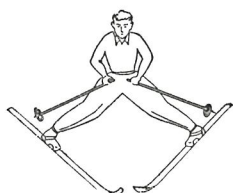
岩倉の自然と歴史について、それぞれの専門の立場から概観的にまた掘り下げた話をお聞きしたわけですが、それでもなお問題が大きいだけに多くの自然科学や人文科学、社会科学の成果をお聞きたいようにも思います。いずれにしても、地域の自然と文化が都会化の波に洗われるというか開発の前に個性をなくして、姿さえ消えていくのは淋しい限りです。天然記念物の深泥池の植生も汚水の流入で以前とは大きく変わったとも聞いています。道路や宅地造成などで古墳や瓦窯跡がつぶされたのも一つや二つではありません。鞍馬の火祭りさえとりやめるうき目にあっています。たしかに岩倉とその周辺は大きく変わろうとしています。それだけに残された文化遺産は、自然をも含めて保護したいものです。河野さんから話のあった高等学校に保管されている加藤延年先生のコレクション、

あれは大変な資料ですから、もっと積極的に活用したい。同志社の各校に散在している貴重な資料を集めて一日も早く総合博物館を設置して欲しいと思います。明治時代の宗教博物館構想を素直に受け継いで、更に発展させたいものです。

じつはお話をたくさんちょうだいしたいと思っておりますけれども、司会がまずくて十分お聞きできなかったように思います。非常に残念です。進行のまずさをお許し願いたいと思います。

長いあいだどうもありがとうございます。

(一九七八年九月十二日 於有終館)



留岡幸助の井上善吉宛書簡

杉井六郎

井上善吉(活泉)は明治三年(一八七〇)生れで、十三歳の年同志社英学校に入學する。留岡幸助は元治元年(一八六四)生れで、二十一歳の年同志社神学校に入學した。したがって、この二人は明治十八年以降新島襄をはじめ内外諸教師の薫陶を受け、生活と共にした間柄である。留岡幸助は明治二十一年卒業し、爾後丹波伝道ついで北海道空知集治監教師となり、三十二年十一月には家庭学校を創設し、一生を社会事業に身を挺して、近代日本における社会的実践の先導者、開拓者の役割を果し、昭和九年二月凱旋した。

井上善吉は昭和十五年古稀を迎えて「逝きし先輩諸賢に就て」(『恩光集』所収)の中で、留岡幸助について次のように語っている。

「留岡君の丹波在住時私が一番多く君に接触したのは、君の福知山在住時代である。(中略)君は常に草鞋、脚絆、肩には大きな鞆を荷ひ、数里の山路を平然踏破、能くも各地に奮戦努力せられたことかと、今に敬服止む能はざるものがある。(下略)」

さて二人の間に取りかわされた交信は数多く、口絵に掲げたのもその一つである。多くの書簡の中から、特にこれを選んだ理

由は、留岡幸助のキリスト教信仰とその社会的実践を知る上で、ここに開陳されている姿勢はきわめて重要であると思ふからである。すなわち、「大兄近時信仰上又は社会との御配慮如何に、小生は外形は余程信仰に変形ありと見らるゝかも知れざるが、真髓は少しも変らず、更に宗教的^{リリジヤス}と相成り申候。伝道の一事も今日の如き上^{カミ}薄面^{ハシラ}を濟度するの遣口にては、どつしりした仕事は出来間敷、我生命^{カミ}我福音^{カミ}を National Life の真内部に衝き込まずしては駄目なりと存し、常に六十余州を遍廻りて有志家と交り、各種の社会に入り込みて修業罷在候」と述べているくだりであつて、当時留岡は二宮尊徳の報徳思想を高唱して全国各地の巡回視察、講演を行なつていた。かれはこれを「修業」と觀念しながら、現実^{カミ}にそこに展開する方法は、キリスト教信仰の純粹、高尚な講壇からの説教を忌避して、ナショナル・ライフ^{カミ}に、しっかりと根を据えた福音伝道を唱導している。「今日の如き上^{カミ}薄面^{ハシラ}を濟度する遣口にてはどつしりした仕事は出来間敷」とは、キリスト教社会事業家の教界に対する頂門の一針たる姿勢を伝えて余蘊がないと云うべきであらう。